

24 山崎千三郎の偉業

著 者 岡本 春一

8代目当主の山崎千三郎は、安政2年（1855）生まれます。明治3年（1870）兄徳次郎が30才と云う若さで隠居します。これに依って僅か15才で千三郎は山崎家の家督を相続します。千三郎は4代目の晨園の残した「遺家訓」を事の外重く受け留め、その精神を事業の中に採り入れ発展させて行きます。これに依って4代目晨園の残した事業と共に、千三郎は山崎家の一大発展に寄与して行きます。

時代は急変します。15代265年続いた江戸幕府が崩壊し終止符を打ちます。長かった幕政に終止符を打ちます。今までは掛川城主に依って、政治経済も全て行って来ましたが、明治元年掛川藩主太田資美の千葉芝山への転封が決まり、明治2年（1869）掛川城の引渡しが行われます。123年の長きに渡った藩政も終わりを告げます。

入替りに静岡藩に就任した徳川家達が駿府城に入城して、同年8月には配下の勤番組山田虎次郎等が掛川城に転任して来ます。そして新体制に脱皮して行きます。急変して城主を失った掛川宿内は、混乱をして暫くは空白期が続きます。

しかし此の混乱期に旧藩御用達仲間は、自己の財産をどう守り抜くかで精一杯であったが、8代目山崎千三郎は先に見た通り4代目晨園の業績を見習い、他の御用達仲間とは全く逆な発想で、豊かな山崎家の財産をこの新時代に、掛川並びに遠州一円の発展の為に、どう有効活用して行くかに腐心していました。千三郎の軸足は自家の財産をどう守り抜くかで無く、如何に活用すべきかにありました。

○製茶並びに農業への貢献 （25 山崎千三郎と製茶産業 参照）

○金融事業への貢献

明治時代前半、掛川の進展に活躍した三者を挙げれば、年齢順に岡田良一郎、河井重蔵、山崎千三郎の三者を挙げる事が出来る。この中で岡田良一郎は県政を巧に取り入て、報徳の精神を生かした事と政治的分野に深く取り入った事で財力以上に力を発揮します。国県に対しても訴える所が大きかったと云えるでしょう。

これに対して河井重蔵は、地域や村の大地主として財力と政治力を大きく活用するが、組織力経済力の面で些少の差があった様に思われます。

これに対して最年少の山崎千三郎は、掛川藩御用達4代目晨園時代以来儒学的精神を生かして、豊かな財力を以てまず地域並びに県内外に深く訴え、経済発展の原動力を担い、千三郎の持つ企画力を充分発揮し、掛川並びに県内外の社会発展の原動力となり、大きい足跡を残していった事は事実であります。

明治維新政府の近代化政策に依って、近代工業の発展の為に、これ等の事業に共鳴する業



山崎千三郎 肖像

者に対して、浜松県は明治6年（1873）11月24日「資産貸付所」の規則を布達します。この呼びかけは岡田良一郎の父佐平治が、天保5年より年々50俵を掛川藩農民・窮民の撫育にと差出した精神を引継ぎ、報徳的思考を以て浜松に「資産貸付所」本店を、掛川宿本陣跡地に支店を置きます。この事業に対しても山崎千三郎はその趣旨に賛同して、率先して惜しみなく多額の経済援助を行います。出資は山崎千三郎2000円、山崎百四郎1550円、山崎徳次郎700円と山崎家が資産貸付所の大株主となって、この事業を側面から助け運営に協力していきます。静岡県は更に明治12年の布達に依って、千三郎は筆頭株主として参画し事業は本格的に始動します。

更に山崎千三郎自身は、新興しつつある地域の茶産業を大きく発展させる為に、自己の財力を如何に活用すべきかを考え、産業の近代化と資金の需要に応ずるべく、翌13年10月には全国でも最初とも云える、資本金30万円で「掛川銀行」を創設します。之には万全を期すべく千三郎家の出資は元より、旧掛川藩で第3位の御用達の鈴木家ともぼっちりで、出資を依頼し掛川に本店、伊達方にも出張店を出していた事が今回の調査で明らかになりました。

製茶は地元並びに牧之原大茶園の最盛期を迎え、製茶産業の海外輸出の進展に伴い、更には掛川葛布並び製糸業の進展による海外輸出で、多額の外国為替の決済から金融調整の必要を痛感します。関係する遠州一円の業者にも働き掛けて、大々的に運用取引の出来る金融機関である「掛川銀行」（静岡銀行の前身？）を掛川宿829番地に創設をしました。

資本金30万円（1株100円計3000株）、本店は掛川に、支店は東京日本橋浜町1丁目24番地に置きます。当然千三郎は300株の筆頭株主になると同時に、自ら掛川銀行頭取として采配を揮います。そして製茶産業に関係する貿易取引の関係から県外の横浜にも支店を出店します。牧之原大茶園の最盛期を迎えると、地元事業家の丸尾文六は翌年相良に支店を出します。そして千三郎の呼び掛けに応じて関係する静岡、島田、金谷にも出張店を増設して行きます。

更に製糸業が盛んになると海外貿易の関係から、福島県の三春を始め二本松、一ノ関、平出にも出張店を出します。こうして県内でも先駆けとなる銀行を作ると云う偉業を成し遂げます。これに依り山崎家は小作米売上金より、銀行の利子収入がはるかに大きいと云う現象が興ります。

○道路建設事業への貢献

次に掛川宿を通る南北道路の信州街道は、二俣森方面から掛川宿を通り、相良港の海上輸送につながり、この地域の経済発展にも係る遠距離輸送の要路でもありました。しかしこの間の道路の未完成を痛感した千三郎は、明治10年（1877）郷土掛川地域の発展の為に、重要物資の集散する北遠二俣森地域の豊かな森林資源、並びに物資を掛川宿に集めようと働き掛けます。

商品となる物はいずれ馬や天秤棒でしか通れない狭い道路しかないので、掛川森間の馬道を太八車で盛んに往来できる車道にしようと、新道の造成工事に乗り出します。千三郎は大胆にも森街道を自費で作ります。そして北遠物資が活発に流入出来る様に造成工事も行い成功裡に終わります。

更に今度は南部の広大な穀倉地帯を始め、諸生産物の豊かな小笠平野の物資を掛川宿に搬入するには、青田山の山陰に遮られて停滞していました。輸送困難なこの山嶮は「一度通って三嘆する」と云う嶮路に阻まれて、馬の背を借りるか人が背負子で登り降りする小道しか有りませんでした。此处で千三郎は自らも 80 円の寄付を行ない、率先して明治 10 年(1877) 大八車で通行できる車道にして、物資が少しでも楽に通れる様に改良工事を行いました。これに依って南北の物資は流通面でも大きく改良が加えられて、掛川宿は一層活発に繁栄の道を歩み始めます。

○明治天皇行在所へ

明治維新と共に新政府は、天皇親政の世になった事を知らしめる為に、改元を行ない一世一元の制度と、国民統合の象徴としての天皇の権威を示す為に、日本全国御巡幸を行ない、御真影を全国の学校に普及して行きます。

当地方とすれば明治 11 年(1878) 明治天皇の北陸・東海道の御巡幸が報道され、同年京都御所を 8 月 30 日御出発、北陸から東海道へと御進行されました。山崎家とすれば思いも寄らない光栄な出来事が起こります。11 月 1 日東海地域御巡幸の途次に山崎家が行在所に指定される光栄に浴します。同日午後 4 時 40 分御着輦遊ばされます。行在所は主として各宿本陣が使われていますが、掛川の場合はどのような状況下にあったかが問題になります。

明治 9 年 6 月 16 日西町より連雀に到る、掛川宿内の主要地 130 戸が焼失する火災が起こります。早速復興に乗り出しますが果して掛川宿の本陣は如何であったか。恐らく周辺の各町内並びに本陣は未だ焦土化し建設の途上であって、宿内の地域環境から見て陛下の御泊りには適さない状況下にあったと想像されます。山崎家は町はずれの奥まった処に在り、景観から見ても本陣より勝ると判断されて、急遽災難を免れた宿内第一の旧御用達家の山崎家に白羽の矢が立ったと思われます。

従って急ぎ本宅の改修と行在所に相応しい部屋を増設して、玄関・取次の間を含めて 44 畳の間が新築されると共に、関係する部屋が改修されると云う大掛かりなものになりました。東海道からの表道路も拡幅され、内外共に御宿泊の景観に合う様に工夫されて行きます。そして 10 日間自宅を開放して、天皇陛下の行在所としてご使用戴くと云う栄誉に浴します。翌日は午前 7 時 30 分御發輦一路東上します。そして山崎家には慰労の言葉を戴きます。山崎家には更に

「御紋付三組、木杯一組、紅白羽二重式疋、金七拾壱円貳拾五銭、行在所立札等」下賜されます。後にこれ等に関係する御巡幸の準備、修理、諸入用諸費は約 100 件 150 円余支出をされていた事が関係帳簿で確認されます。

昭和 8 年(1933) 11 月 2 日文部省告示第 313 号に依って、「明治天皇掛川行在所」聖跡として山崎家が指定されました。

○鉄道運輸事業への貢献

明治維新政府は西洋文化をいち早く取り入れて、産業の近代化を図ろうとします。明治 5 年新橋・横浜間に鉄道を敷設したのを手始めとして、明治 16 年(1883) 明治新政府は、日本の大動脈である東京～大阪間に鉄道を敷設する計画を立てます。そして東海道案が提出されると、陸軍は早速軍事目的で反対をします。東海道へ鉄道を敷設すれば、諸外国の軍隊が

攻めて来れば、第一に鉄道線路は占領され破壊されてしまう。または利用されて戦況は更に悪化すると。従って中仙道案が採択される事になりますが、これには多額の経費が掛かります。

明治 23 年（1890）日本は「帝国議会」が開催される事になります。全国から国会議員が迅速に参集するには、鉄道の早期完成が必要になりました。そして静岡～東京は 6 時間で行ける様にと考えます。これに合わせる様に政府は明治 19 年（1886）7 月閣令 24 号に依って東海道案が決定して敷設される事になります。そして静岡～浜松間は海岸通りを通す事に決定します。

しかしこの案に断固として近代産業育成の面からも、猛反対運動を起こしてその先頭に立ったのが山崎千三郎です。千三郎は「海岸通りを通せば山も坂も少なく建設費も安くなるだろうが、農村地帯で乗る人も少なく、運ぶ貨物も少ない。宿場通りを通せば既に東海道の中心街で、日本の大動脈である。各宿場には共に人口が集中して利用者は多く、運賃収入は莫大である。そして政治・経済・文化・教育の中心地で、公共設備は整い物資の集散地の拠点となっている。これを見逃す訳には行かない。大局的に永年の効果を見れば、海岸線を通すのは日本の一大損失である。」山崎千三郎を始め有志は延々と長文の文章に綴り『東海道鉄道線路の儀に付上申』の至って長文の上申書を作り、静岡県知事関口隆吉に提出します。同時に藤枝～磐田間の 130 ヶ町村、744 人の戸長を始め有力者の署名を集めて、静岡県知事並びに各省庁に提出しました。

この熱意の籠った上申書は見る人をして感服せしめた。近代産業発展の為にも欠く事の出来ない重大事で、遂に政府も東海道鉄道は宿駅ルートを採用する事に決定します。時を移さず東海道鉄道の敷設工事は進展して行きます。

また当時の余話としては、日坂宿の住民は東海道鉄道が日坂を通れば、旅客は減少し多くの旅籠は倒産する。そして駕籠かき人夫は飯の食い上げになるから、反対したと云う。しかし千三郎の出した請願書には、日坂宿戸長を始め宿内多くの有力者が署名をしている。また海岸通りの住民は汽車が轟音を出して通れば、魚は逃げて漁が出来なくなる。また汽車の通る度に農夫は見惚れて仕事がはかどらない、と反対したと云う。当時とすればこうした噂話は大事業の前には茶飯事で、真実を掴むのは大変困難です。

東海道鉄道は無事工事も進展して、遂に明治 22 年（1889）4 月 16 日開通の日を迎えます。掛川宿は仲町から掛川新駅の間は田園地帯であったから、当日は中町から新駅の取り付け道路の開通式も兼ねて、祝賀式が関係者 200 人の代表に依って行われました。駅前と仲町両方の入口には緑のアーチを作り、町は日の丸の旗を掲げ、街頭では祝酒も振る舞われ、百発の花火を打ち上げて一日中賑わい祝福したと云います。

そして近郷近在の善男善女は、今迄見た事も無い「丘蒸気」（汽車）はどんなものか、一目見ようと南から北から数万人の人々が押し寄せて、町は大混雑になった事が各社の新聞記事にも載っています。

東海道鉄道の開通と共に、山崎千三郎は早速明治 22 年「掛川運輸会社」資金 10 万円を出して創設します。更に「東海道委託社」も立ち上げて、掛川駅に集散する産業物資や貨物の利便性を図って行く事業を開始します。

○道路建設事業への貢献②

東海道鉄道の開通に依って、最もネックになっていた南部の青田山の山越えの交通障害を、何とか解決を図ろうと明治 25 年（1892）山崎千三郎は地元南郷村河井重蔵、上内田村角皆七郎平等に働き掛けて「青田坂隧道工事組合」を設立して、県議会に働き掛けます。

千三郎の提案は認められます。そして掘削工事に取り掛ります。工費は 6071 円余の経費を以て明治 28 年に完成します。トンネルの長さは 115 米で近代工法に依って行われ、レンガ 199、434 個、セメント 194 樽が使用されました。頑丈な近代トンネルが完成して、地域住民の喜びはこの上ない歓声に浸りました。これに依って江戸時代以来南北交通路の最大の難関処は、青田トンネルの開通に依って一大発展を遂げ、小笠・城東両郡の交流と共に産業交通の発展に大きく貢献しました。

○大井川疎水計画への貢献

明治 20 年（1887）山崎千三郎は更に遠大な計画を立てます。掛川地域並びに小笠平野は大きい山も川も少なく、水不足の地帯で県下でも溜池の最も多い地帯です。日照りが続けば谷の奥に造った溜池はすぐ干上がってしまい、各地共に夏は水争いが絶えず起こり、旱害で悩まされていました。山崎家を始め各地の地主や農家も、毎年不安定な気候に悩まされました。特に農家は年貢収納時には頭を抱えて苦勞をし、やりくりには奔走していました。

これを解決する手段として、当時の人では想像も付かなかった大井川の水を引き、掛川、小笠平野に引き入れようと云う計画を千三郎は考えます。人々は牧之原の台地に遮られて、実現不可能と考えていただけに驚きました。

千三郎は明治 21 年（1888）2 月 20 日、早速大学院工学士小山友直を自宅に招いて、「大井川疎水計画」構想を述べて小山氏の意見を伺いました。小山氏もこの計画を充分調査検討した結果、牧之原台地に導水路を掘って、掛川・菊川に通水する事は可能と判断しました。この計画に基づき「大井川疎水工事測量願」を関口県知事に提出して裁可を待ちます。

認可が下りると共に、小山氏を中心とする技師に依って測量が開始されます。事務所は小夜中山の久延寺に置いて実測に入ります。「疎水測量記録」は 2 月 20 日より記載が始まっています。この計画の測量を期に土地の有力者河井重蔵、三橋四郎次、丸尾文六等も引き入れて取掛ります。

実測はまず大井川の牛尾地区に取水口を作り、牧之原トンネルを通し、

- ① 南ルートは菊川に引き入れた用水は西方～佐倉村へ。
- ② 中ルートは西方～大東～横須賀へ。
- ③ 北ルートは海老名～千羽～五明～原谷川へ。
- ④ 海老名瀧に 600 馬力の発電所を作り、その電力で掛川に近代工業を興す。
- ⑤ 江戸時代より飲料水に困っていた掛川町に上水道を作り、解決を図る。
- ⑥ 海老名池水門で水量調節を行ない、掛川～福田港に廻船計画を立つ。

と云う遠大なものでした。明治 22 年 1 月総延長 27 万 3 千余尺、工費 42 万円の歴大な設計で「大井川疎水計画図」は完成しました。千三郎は掛川で早速農学社に関係者・聴衆を集めて報告会を開いた。静岡では浮月楼で再び報告会を開いて、45 ヶ町村 69 名の有力者の参加を得て出資の呼び掛けが行われました。

これに依って受益面積は佐野郡下 2000 町歩、城東郡下 7000 町歩の広大な地域の、灌漑用水が確保され受益する事になりました。そして農業用水だけに留まらず、中東遠地域の産業発展にも結び付け様とする遠大な計画でした。この計画図は掛川市が保管しています。昭和 47 年（1972）「大井川右岸用水」計画が持ち上がった時に再利用されています。明治時代に山崎千三郎が行なった測量図は 85 年後の今日に至って、実に正確なものであった事が実証されています。

この資料は『掛川市史』下巻編纂時、収集資料を参考にしています。

○行政への貢献

明治 6 年（1873）4 月 17 日「浜松県第 3 区 1 小区南西郷村戸長申付候事」と早速山崎千三郎は掛川宿の戸長を命ぜられ、掛川宿全体の取締りを申し渡されます。明治 22 年（1889）4 月、明治新政府に依る「市制・町村制の施行」が実施されると、近代日本を作り上げる重要な意義を持つ、地方制度の改革が行われます。この方針に従い掛川地区は掛川町等 14 ヶ町村が誕生します。今までの 30～50 戸単位を 1 町村とする小村は吸収統合して、大規模町村として無駄を省き経済力、機動力のある町村の建設を目指します。

この合併によって掛川宿の場合は、宿だけでなく下俣町、十九首町、仁藤村と合併します。更に掛川町と南郷村は町村組合を組んで町役場を紺屋町の掛川病院（克って明治 3 年 7 月千三郎が 300 両の寄付金を基に建設され、医師 4 名を擁する）内の敷地に置いて発足します。今まで掛川宿を一手に引き受け、地方発展の為に尽力して来た山崎千三郎は、地域住民の大きい期待と要望を受けて、明治 22 年初代の掛川町長に推選され就任する事になりました。

太田侯が千葉芝山に転封後、勤番組が掛川宿に入り行政の一端を握って発足したとは云え、やはり江戸時代から地域に根を張った山崎家が、地域の発展の為に自らの財力を欲しみなく活用します。この時代山崎家の年貢米収入は明治 4 年 628 俵、8 年 1124 俵、10 年 1384 俵になっています。更に殖産興業の発展に力を注いできた山崎千三郎は、掛川町長に最も相応しい人物として、掛川宿民の信頼の上に着任します。然しながら各町村は共に旧来の諸事情もあり、その調整に苦心しながら新しい時代に即応した町村作りに励んで行きます。

○学校事業等への貢献

明治 7 年（1874）5 月新政府の「学制頒布」に依って、千三郎は私学願を出して、南西郷の弘法寺に時習舎を建て、教師 5 人を雇い開校します。出資山崎千三郎 1000 円、松本文治 500 円、鳥居半助 300 円、10 ヶ年賦で支払う事にします。

明治 8 年 8 月には私学を更に西南郷村・下俣村・杉谷村、上張村、結縁寺村・亀ノ甲村六ヶ村公立学校にする為の願を出します。学資金 1635 円を 10 ヶ年賦で寄付しています。

また明治 15 年 11 月南西郷小学校建設時には、自ら 430 円の寄付金をして静岡県より銀杯を戴いています。その他学校関係はその都度寄付金を欲しみなく行い、県知事より木杯を頂いた事、並びに賞状を頂いた事が記録に残っています。

次に明治 19 年（1886）山崎千三郎等 8 名を幹事（会長を置かない）として、「蕩々会」と云う気楽な名を付けた結社が出来ました。

第 1 条本会ノ趣旨ハ文学上講義・或ハ演説ヲナシ、暫次ニ哲学ノ域ニ至ルヲ期ス（以下略）

を主目的にしている。明治 12 年以来政治結社が掛川でも結成されている。また前年には岡田良一郎が「報徳社」に続き「農学社」を起こしている。各界の活動が活発になる中で、蕩々会は坪内逍遙（小説家）・南条文雄（僧侶）等歴史に残る有名人 8 名を講師に、主旨に添った活動を始めている。年 4 回雑誌を発行し意見を述べている。幹事の中に河井重蔵等の名前もあり、多分に岡田良一郎に対抗する意味合いも有った様に思える。

○鉄道運輸事業への貢献②

東海道鉄道の開通に依って、各地からの交通は頻繁になって来ました。明治 26 年 (1893) 山崎千三郎は更に再度北遠産業の発展に目を向け、二俣森町方面の産業資源の流入と共に、人々の往来を潤沢にする為に、森街道に沿って道路を拡張して、鉄道線路を作り、これに掛川～森間に馬車鉄道を走らせる「掛川馬車鉄道」計画を立てます。延長 13 キロ米・12 人乗りを計画して、井上内務大臣に敷設願を提出します。資本金の 5 万円は山崎千三郎自身が負担するという大胆なものでした。しかしこの計画は翌年 27 年には日清戦争が勃発して、計画は棚上げ状態になります。

明治 28 年 (1895) 日清戦争の終結によって、ストップされていた計画は、進展する近代化の波に乗って、工業生産と産業運輸事業の変化を考慮して千三郎は、

「馬車鉄道ハ規模小ニシテ運輸力大ナラズ、数多クノ貨物旅客輸送シテ以テ地方日増ノ需要ニ応ズルハ到底其任ニ非ズ候」

と敷設願を撤回します。そして新時代に相応しい蒸気機関車に依る「掛川鉄道株式会社創立願」に切り替えます。

「掛川鉄道株式会社創立願」

今般、静岡県遠江国佐野郡掛川町ヨリ、同国周知郡森町ヲ経テ、同国豊田郡二俣町ニ達スル軽便汽鑛鉄道ヲ敷設シ、以テ旅客貨物輸送ノ業ヲ経営仕度、其理由ヲ左ニ開陳仕候、遠江国ノ地勢タル中央以北ハ山脈重疊、為ニ交通ノ便ヲ欠キ候ヘトモ、巨木良材ヲ出シ、製茶業ノ最モ盛ナル、其他椎茸・薪炭・石炭等ノ物産ニ富ムハ、実ニ此ノ地方ニ有之候…（本文以下略）

明治 28 年 12 月 27 日

掛川鉄道株式会社

創立発起人連署 ㊟…

逋信大臣 白根専一殿

この様に逋信大臣に創立願を提出しました。資本金は 50 万円で自ら筆頭株主となって、株式で全体を賄う方式に変えて働き掛けを始めます。これには東京の実業家渋沢栄一等も巻き込んで万全を期します。渋沢氏がこの事業に加わったのは、天竜川上流地域に当時は王子製紙会社の工場があったので、掛川鉄道を利用して搬出する計画があった様です。こうした政

財界の重鎮の名も連ね 77 人の発起人を集めて、敷設に向けて精力的に働き掛けを行ないました。

○山崎千三郎斃れる

明治 29 年（1896）掛川町を始め、遠州一円の将来を一手に引き受けて、行政、経済等近代産業発展の為に、推進役の筆頭に立って活躍し、千三郎自ら山崎家の財産を最大限に活用させながら、地域発展の指導力ナンバーワンとして、骨身欲しまず突っ走って来た山崎千三郎は、同年 5 月体調に変化が見られ三到堂医院の医療の手当も充分尽くしましたが、遂にこの年 7 月 24 日 41 才の若さで生涯を閉じる事になってしまいました。菩提寺である徳雲寺へ葬られ、「謙山有光居士」と諡号されました。

この事は掛川町は元より遠州地方一円にとっては一大損失でありました。千三郎が愈々油の乗り切って、これからが大事業の本番に入ろうとしていた時だけに、有力者を失った悲しみと、その衝撃は大きかった。山崎千三郎がもう 20 年間、健在で活躍出来たら、浜松市にも劣らない魅力のある大都市に成長したであろうと思われます。「巨星墜つ」の言葉の通り、山崎千三郎を失った掛川町はエンジントラブルを起こした飛行機の如く、尽くす手立ても無く唯啞然と見守るのみであった様にも思われます。

山崎千三郎の死は余りにも大き過ぎた。その後を引継いだ掛川町政は進展するどころか、後任町長も 2 年の任期を全うする者は殆んど無く、1 年いや 1 年も持ち応えず辞任する輩も出て、遂に町長のなり手が無く、掛川町に在った小笠郡役所の職員が町長代理を勤めるまでに零落してしまいます。その後「遠参鉄道計画」も立てられたが、提言だけで実現を見ず終わってしまいました。この様に提案はしても実践牽引する者も出なく、明治 29 年（1896）より大正 12 年（1923）の 27 年間に、18 人の町長が入替る様相になりました。大正 12 年東山口村出身の鈴木理一郎が掛川町長に選任されます。この就任に依って初めて掛川町政が蘇生して建て直しに成功します。

8 代目山崎千三郎が郷土の産業の発展に尽くした努力は、実に遠大なものがありました。時代を先取りした近代化構想と、その実践力は静岡県下の有力者の眼を見張らせるものがありました。自家の財力を抱え込むのではなく、如何に財力を地域の発展に結び付けるかにありました。此処に軸足を置いた千三郎の企画力や実践力の素晴らしさには目を見張るものがありました。

掛川地域並びに遠州一円を中心にした産業の近代化構想、道路整備と鉄道事業構想、更に緻密な水利計画と実践力、何れの面を取っても凡人の発想の及ぶ所では有りません。この様に明治時代浜松と互角に争う有力者として、千三郎が生涯に渡って活躍した全貌を考えた時、掛川地域を中心に県下各地の発展に寄与した事は、後世に大きく名を残すと共に、これを顕彰する第一人者である事は間違いない事実であります。